

1 『ピーター・ラビットのおはなし』とその舞台

ピーター・ラビットは、日本では食器や文房具などの日用品のキャラクターとしてよく販売されているが、動物を愛するヘレン・ビアトリクス・ポター（Helen Beatrix Potter, 1866-1943）によって生まれた絵本の主役のうさぎである。一巻目の『ピーター・ラビットのおはなし』（*The Tale of Peter Rabbit, 1902*）は、フレデリック・ウォーン社から出版されるや瞬く間に人気の絵本となった。『ピーター・ラビットのおはなし』を皮切りに、フレデリック・ウォーン社から『グローラスターの仕立て屋』（*The Tailor of Gloucester, 1903*）や『りすのナトキンのおはなし』（*The Tale of Squirrel Nutkin, 1903*）など、数多くの絵本が立て続けに出版された。1921年には、王立盲人擁護協会から点字版が出版された。

●原作者ポターの幼少時代（『ピーター・ラビットのおはなし』誕生まで）

ユニテリアンの両親のもと、ロンドンのサウス・ケンジントンで生まれた。中産階級だが資産家の家庭で育ち、教育は家庭で行われていたため、5歳離れた弟が誕生するまで遊び相手が少ない環境で育った。幼いころから絵を描くことを好み、キャメロン女史による絵画教育が12歳より行われた。ポター家は毎夏、避暑のためにスコットランドで過ごしていたが、1882年からはレイク・ディストリクト（Lake District）のウィンダミア近郊のレイ城で過ごすようになる。ペットショップで買ってもらったうさぎを始め、ハツカネズミ、ハリネズミ、リス、カエル、トカゲ、ヘビ、カメ、コウモリなどさまざまな動物をペットとして飼育し、スケッチも楽しんでいた。動物以外にキノコにも関心を示し、キュー王立植物園でキノコの観察・研究も行うほどであった。豊かな自然の中で、動物や植物に関心を寄せ、その中で想像力を培ったことが『ピーター・ラビットのおはなし』につながっている。

●レイク・ディストリクト

ポターは出版の合間を縫って農場経営にも勤しんだ。幼いころから周囲の動物を愛し、自然と触れ合ってきたポターにとって、農地が失われていくのは耐え難い事であった。1905年、ウィンダミア近郊のソーリーにあるヒルトップ農場を購入した後、文明が入り込むのを阻止するために、1909年にニア・ソーリーにあるカッスル・コテージを購入、1912年には、ウィンダミアでの水上飛行機工場建設への抗議運動を成功に導き、1924年には、2000エーカーのトラウトベック・パー

ク農場を購入した。産業革命は、イギリスが「世界の工場」とも言われ、イギリス各地に工場が建てられるなど、イギリスに大発展をもたらしたが、自然が美しいレイク・ディストリクトもその工場建設の標的となっていた。ポターは土地を購入していくことにより、かつてのままの自然を守り続けた。ポターが遺言で所有地をナショナル・トラスト (National Trust) に寄付をし、原風景を守ってもらうことにしたため、現代でもその美しい光景がそのまま残されている。

●『ピーター・ラビットのおはなし』

『ピーター・ラビットのおはなし』は、ウサギたちの紹介に続き夫が人間のマクレガーさんに殺されてしまった母親うさぎが子供たちに「マクレガーさんの畑に入らないように」と忠告するところから始まる。いたずらっ子のピーターは、母親の言いつけを破り、マクレガーさんの畑に入り、野菜を食べ、マクレガーさんに見つかり、命からがら逃げ帰るという話である。あらすじは教訓的であるが、イラストは細部まで凝らされていて、ポターがいかに動物と自然を愛していたかが分かる。最初のページのイラストは母親うさぎと顔を見せており3匹の子うさぎとしっぽだけを見せている子うさぎがいる。そのしっぽがピーターである。いたずらっ子らしさが垣間見えると同時におはなし (tale [téil]) としっぽ (tail [téil]) が掛詞になっている。また、物語の最後にやっとの思いで帰宅し、寝込んでいるピーターに母親が食事を与えている場面では、ピーターは耳だけが布団から出ているが、その耳が反省や味わった恐怖など全てを物語っている。同時にピーターを介抱している母親の眼差しも様々なことを物語っている。

『ピーター・ラビットのおはなし』以外の絵本でも、『ティギーおばさんのおはなし』 (*The Tale of Mrs. Tiggy-Winkle*, 1905) では、あらいぐまのおばさんがアイロンをかけたり洗濯物を干したりしている。『ジェレミー・フィッシャーさんのおはなし』 (*The Tale of Mr. Jeremy Fisher*, 1906) は、カエルのおじさんの物語で、カエルが新聞を読んだり釣りをしたりする。その他の作品にも、アヒルや猫、ネズミ、犬、りす、キツネ、子豚などが登場する。いずれも動物であるにもかかわらず、大層愛くるしく擬人化されていて、読者の周りにいそうな、そんな親近感を与えてくれるのである。

(遠藤 花子)